

教育目標	
自ら学び、自他を認め、未来を創造する生徒の育成	
年度末の最終評価	
自己評価	<p>教育目標の達成状況、次年度に向けた見直し</p> <p>色々な場面で、子どもたちに「果敢に挑戦」し失敗が許される学校になるように声をかけてきた。挑戦する気持ちを持つことが学力向上にもつながり、本校の目指す資質・能力の形成にも必ずつながると考えている。次年度以降も、果敢に挑戦しながらも、常に予測や計画が立てられる子どもたちを育てる必要があると感じている。</p>
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>久世地域は近年大きな変化の途上にあり、今後も人口増加に伴う土地価格の上昇や地域全体の経済力向上が見込まれる。一方で、地域には従来から受け継がれてきた特色ある強みも依然として存在している。具体的には、学校教育に対して積極的に協力する地域住民の姿勢や、「地域の子どもは地域で育てる」という価値観を共有する大人が多いことなどが挙げられる。</p> <p>今後、他地域からの転入者が増加したとしても、時間の経過とともにこれらの方々も久世地域の一員として根付き、地域社会の担い手となっていくことが期待される。こうした地域構造の変化をふまえ、久世三校には学校を中核として「学校・保護者・地域」が一体となり、子どもたちの健やかな成長を支える風土を形成・発展させていく上で、極めて重要な役割を果たすことが求められている。</p>

学校関係者評価の評価日・評価者

	評価日	評価者
中間評価	10月3日(金)	共同機構久世学校運営協議会
最終評価	3月2日(月)	共同機構久世学校運営協議会

(1)「確かな学力」の育成に向けて『学力向上プラン』

重点目標
「予測・計画する力」「批判的に考える力」「多面的に考える力」「コミュニケーション力」「協力する姿勢」「自らふりかえる姿勢」の育成
具体的な取組
<p>○6つの資質能力を育成する授業の推進</p> <p>身に付けさせたい資質能力の育成を目的とした授業の研究を進め、そのテーマにおける研究授業・研究協議を行い、学校全体での意思統一を図る。</p> <p>○上記の6つの資質能力を書いたカードを各教室の掲示物として配置する。各先生方が授業中の活動で育てたい資質能力を掲示して提示し、生徒と共有して活動を行う。活動後、掲示した資質能力に関してフィードバックを行う。</p> <p>○キャリアパスポート記入を必ず前回記入したものと比較しながら行うようにする。</p>

○キャリアパスポートを教育相談の資料として活用し、教育相談をキャリアカウンセリングの場としても活用する。

(取組結果を検証する) 各種指標

・6つの資質能力と関連付けた学校評価の項目による

- 19 見通しを持って計画を立てることができていると思いますか。
- 20 「これでいいのか?」「本当に正しいのか?」など色々なことに疑問を持つことができていると思いますか。
- 21 1つのことを色々な視点から考えることができていると思いますか。
- 22 自分の気持ちや考えを伝えたり、他者の気持ちや考えを聞いたり、コミュニケーションがとれていると思いますか。
- 23 自分は仲間と協力して物事を進めようとしていますか。
- 24 自分は様々な場面でよかった点や悪かった点などを見つめなおそうとしていますか。

中間評価

各種指標結果

○学校評価アンケートの数値結果

- 19 見通しを持って計画を立てることができていると思いますか。
(実現度)R7 年度入学 1 年→4.2
R6 年度入学 1 年→4.3 2 年→4.3
R5 年度入学 2 年→4.9 3 年→4.6
- 20 「これでいいのか?」「本当に正しいのか?」など色々なことに疑問を持つことができていると思いますか。
(実現度)R7 年度入学 1 年→5.2
R6 年度入学 1 年→5.3 2 年→5.5
R5 年度入学 2 年→5.6 3 年→5.5
- 21 1つのことを色々な視点から考えることができていると思いますか。
(実現度)R7 年度入学 1 年→4.8
R6 年度入学 1 年→4.8 2 年→4.8
R5 年度入学 2 年→5.3 3 年→5.3
- 22 自分の気持ちや考えを伝えたり、他者の気持ちや考えを聞いたり、コミュニケーションがとれていると思いますか。
(実現度)R7 年度入学 1 年→5.0
R6 年度入学 1 年→5.3 2 年→5.0
R5 年度入学 2 年→5.5 3 年→5.5
- 23 自分は仲間と協力して物事を進めようとしていますか。
(実現度)R7 年度入学 1 年→5.3
R6 年度入学 1 年→5.4 2 年→5.4
R5 年度入学 2 年→5.9 3 年→5.6
- 24 自分は様々な場面でよかった点や悪かった点などを見つめなおそうとしていますか。
(実現度)R7 年度入学 1 年→5.1
R6 年度入学 1 年→5.2 2 年→5.2
R5 年度入学 2 年→5.7 3 年→5.5

自己評価	<p>分析（成果と課題）</p> <p>久世中学校で定めた育成を目指す6つの資質能力に関して、大きな変化があるとは言えない結果であった。特に「予測・計画する力」に大きな課題がある結果となった。</p> <p>昨年度新たな学校境域目標と、育成を目指す6つの資質能力を定めたことで、アンケートの数値を通して効果測定ができる形を作れたことは成果と言える。</p>
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <p>○教職員全体の「6つの資質能力」への意識を高めることによって、学校行事や日々の取り組み、授業の中で「6つの資質能力」の育成に繋がる工夫を各教職員が考え、実行していく状況を作っていく。</p> <p>○「予測・計画する力」の育成に関しては、「テスト前学習計画表」や「長期休み計画表」の活用、各授業の中で単元の流れを提示したり、振り返りを充実させたりすることによって生徒が「予測・計画」できる環境をまずは整えることによって、学習マネジメント能力を高めていく工夫をしていく。</p>
	<p>（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標</p> <p>・6つの資質能力と関連付けた学校評価の項目による</p> <p>19 見通しを持って計画を立てることができていると思いますか。</p> <p>20 「これでいいのか?」「本当に正しいのか?」など色々なことに疑問を持つことができていると思いますか。</p> <p>21 1つのことを色々な視点から考えることができていると思いますか。</p> <p>22 自分の気持ちや考えを伝えたり、他者の気持ちや考えを聞いたり、コミュニケーションがとれていると思いますか。</p> <p>23 自分は仲間と協力して物事を進めようとしていますか。</p> <p>24 自分は様々な場面でよかった点や悪かった点などを見つめなおそうとしていますか。</p>
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>家庭の経済状況による学力差（SES・ソーシャル・エコノミクス・ステイタス）により学習に困りを抱えている生徒について、丁寧に支援を行っていく必要がある。学校教育で家庭の経済格差を埋めることは難しいが、家庭の経済状況による学力差（SES）は学校教育によって挑戦的に乗り越えていってほしい。また全国的に子どもの読書離れが進んでいる状況において、生徒達が読書の重要性を認識している結果が出ているのは、教職員の働きかけが功を奏しているといえる。他方、生徒達のスマートフォン等の時間はどんどん長くなっている。1人1台のGIGA端末が新しく整備されたこともあって、GIGA端末の持ち帰りによる効果的な家庭学習の在り方を模索していく必要がある。</p>

最終評価

<p>各種指標結果</p> <p>○学校評価アンケートの数値結果</p> <p>19 見通しを持って計画を立てることができていると思いますか。</p> <p>（実現度）R7 年度入学 1年→4.2（中間）、4.3（12月）</p> <p>R6 年度入学 1年→4.3 2年→4.3（中間）、4.5（12月）</p> <p>R5 年度入学 2年→4.9 3年→4.6（中間）、4.7（12月）</p> <p>20 「これでいいのか?」「本当に正しいのか?」など色々なことに疑問を持つことができていると思いますか。</p> <p>（実現度）R7 年度入学 1年→5.2（中間）、5.2（12月）</p> <p>R6 年度入学 1年→5.3 2年→5.5（中間）、5.3（12月）</p>
--

R5年度入学 2年→5.6 3年→5.5(中間)、5.7(12月)

21 1つのことを色々な視点から考えることができていると思いますか。

(実現度)R7年度入学 1年→4.8(中間)、4.7(12月)

R6年度入学 1年→4.8 2年→4.8(中間)、5.0(12月)

R5年度入学 2年→5.3 3年→5.3(中間)、5.3(12月)

22 自分の気持ちや考えを伝えたり、他者の気持ちや考えを聞いたり、コミュニケーションがとれていると思いますか。

(実現度)R7年度入学 1年→5.0(中間)、5.1(12月)

R6年度入学 1年→5.3 2年→5.0(中間)、5.2(12月)

R5年度入学 2年→5.5 3年→5.5(中間)、5.6(12月)

23 自分は仲間と協力して物事を進めようとしていますか。

(実現度)R7年度入学 1年→5.3(中間)、5.4(12月)

R6年度入学 1年→5.4 2年→5.4(中間)、5.5(12月)

R5年度入学 2年→5.9 3年→5.6(中間)、6.0(12月)

24 自分は様々な場面でよかった点や悪かった点などを見つめなおそうとしていますか。

(実現度)R7年度入学 1年→5.1(中間)、5.0(12月)

R6年度入学 1年→5.2 2年→5.2(中間)、5.4(12月)

R5年度入学 2年→5.7 3年→5.5(中間)、5.7(12月)

自己評価

分析(成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題

中間評価と比較して、多くの項目で0.1ポイント以上の上昇が見られた。特に『23 自分は仲間と協力して物事を進めようとしていますか。』については昨年度の最終の結果と比較して、すべての学年で結果の上昇が見られた。学級での特別活動や総合的な学習の時間、学校行事などの取り組みを通して、仲間づくり活動に取り組んできた結果が表れていると考えられる。全体的な結果を見ると、「周囲とつながっている感覚」や「コミュニケーション力」については生徒、保護者共に身につけているという感覚を持っていると言える。一方で「見通しを持って考える力」「多面的に考える力」「批判的に考える力」などの個人の中で深く考える力に課題があると言える。

分析を踏まえた取組の改善

各教科および総合的な学習の時間の中で探究的な学びを取り入れることで、物事を多面的にとらえたり、批判的に考えたりする力の育成を図る。具体的には教科会を定期的に持つことで教科内での目標の共有と情報交換の機会を確保する。

また、キャリアパスポートの活用を充実させることで、個人内での見通しを持って物事に取り組む力や他者との関係の中で自分自身を見つめる力の育成を図る。

学校関係者評価

学校関係者による意見・支援策

落ち着いて学習に取り組める教室環境が概ね確保されているが、学習確認プログラムおよび全国学力・学習状況調査など、学力を測定する指標においては、現時点で大幅な学力向上は見られない。一方で、教科をこえて授業の学習スタイルや学習の流れを統一する取り組みについては、一定の効果がみられる。また、子ども達の主体的な学習姿勢や、コミュニケーション力の向上も見られる。しかし、これらの質的变化は、直ちに学力の数値として表れるものではないため、短期的な結果のみにとらわれるのではなく、引き続き中長期的な視点で生徒の学習の定着状況を丁寧に見取り、継続的に検証していくことが重要である。

さらに、保護者からのニーズが高い「予測する力・計画する力」については、現代の子どもたちが置かれている状況を考慮すると、スマートフォンや SNS の普及により情報過多が進み、必要な情報を取捨選択した上で計画を立てることが、これまで以上に困難な時代をむかえているといえる。そのため、これらの力を育成するための教育的支援は、今後より一層重要になると考えられる。

(2)「豊かな心」の育成に向けて

重点目標

1. 生徒の自己有用感を高め、自尊感情を育てる「ピア・サポート」事業の継続
2. 「おもてなしの心(目の前の人を大切に作る精神)」の育成
3. 道徳教育の充実

具体的な取組

1. 体験的な活動を通じて、社会性や自己肯定感・有用感を高める「ピア・サポート」活動に継続して取り組む。
 - ・他者との関わりのなかで、参加するすべての生徒が自己有用感を実感できるように、年齢の差、経験の差を利用したお世話活動を実施する。
 - ・十分に事前・事後と取り組むことで、つけたい力をより明確にして生徒が実感しやすい場を提供する。
 - ・行事だけの単発的なものに終わるのではなく、日常の学校生活や授業のなかでも、自己有用感を高められるカリキュラム・マネジメントの視点をもつ。
 - ・3年生を核とした異年齢集団を築き上げるために、3年間を見通した取り組みのなかで育てる。
2. 久世教育機関協働協議会(保育園・小学校・中学校・児童館・図書館)が協働して、あいさつと読書を中心に取り組み、育ちと学びの連続性を高める。
3. あいさつを通して、人と人とのつながりを大切にするなど、コミュニケーション力を育成する。

(取組結果を検証する) 各種指標

1. 学校評価アンケート
 - ⑥「楽しく学校生活を送っていますか」(生徒)
 - ⑦「自分から進んで、気持ちよくあいさつをしていますか」(生徒)
 - ⑧「学校や社会のルールやマナーを守ることを心がけていますか」(生徒)
 - ⑨「相手の気持ちを考えて行動していますか」(生徒)
 - ⑬「クラスや学校の活動や生活の中で、人の役に立っていると感じていますか」(生徒)
 - ⑭「自分には、よいところがあると思いますか」(生徒)
 - ⑮「今の自分が好きですか」(生徒)

中間評価

各種指標結果

⑥5.8 ⑦5.4 ⑧5.7 ⑨5.4 といずれも高い実現度を保っており、生徒自身の心の育成は順調であると考えられる。それに反して、⑬、⑭、⑮ともに平均 4.5 程度の実現度となり、生徒の自己有用感は低い実現度となっている。

保護者についても同様な傾向が強く、特に⑬子どもが生活のなかで、人の役に立っていないという結果が見られる。

自己

分析(成果と課題)

現状の取り組みを維持しつつ、生徒・保護者の自己有用感をいかにして、あげるかが今後の課題であ

評価	<p>ると考える。ただし、生活のなかで、人の役に立つという部分は、なかなか大人でも持ち合わせる事が少ないのも事実である。また、保護者の有効回答数が少ないことも結果に影響を与えている可能性もあるので、学校評価への保護者の回答方法も探っていきたい。</p>
	<p><u>分析を踏まえた取組の改善</u></p> <p>社会とつながること自体が未経験で、あったとしても少ないと感じるので、小中連携や地域とのつながりを増やすことで、自己有用感の改善につながると考える。また、学校行事が多い後期でもあるので、しっかりと目的を持ち、行事に参加するように生徒に考えさせていきたい。</p>
	<p><u>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</u></p> <p>⑥「楽しく学校生活を送っていますか」(生徒)</p> <p>⑦「自分から進んで、気持ちよくあいさつをしていますか」(生徒)</p> <p>⑧「学校や社会のルールやマナーを守ることを心がけていますか」(生徒)</p> <p>⑨「相手の気持ちを考えて行動していますか」(生徒)</p> <p>⑬「クラスや学校の活動や生活の中で、人の役に立っていると感じていますか」(生徒)</p> <p>⑭「自分には、よいところがあると思いますか」(生徒)</p> <p>⑮「今の自分が好きですか」(生徒)</p>
学校関係者評価	<p><u>学校関係者による意見・支援策</u></p> <p>久世三校ともに「学校が楽しい」「仲間を大切にしている」という項目が高い。これは学校での取組はもちろんのこと「久世は1つ」を合言葉に久世地域で醸成された子ども達の意識を映し出しているといえる。一方で久世地域はこれから人口増加が見込まれ、多様な保護者、子ども達が流入してくる中で、学校は異なる価値観と出会う場としての様相が濃くなっていく可能性がある。多様性が分断を生まないよう、学校は様々な場面で常に落としどころを探っていかなければならなくなると予想される。</p>

最終評価

	<p><u>(中間評価時に設定した) 各種指標結果</u></p> <p>⑥「楽しく学校生活を送っていますか」(生徒)→6.0</p> <p>⑦「自分から進んで、気持ちよくあいさつをしていますか」(生徒)→5.4</p> <p>⑧「学校や社会のルールやマナーを守ることを心がけていますか」(生徒)→5.8</p> <p>⑨「相手の気持ちを考えて行動していますか」(生徒)→5.7</p> <p>⑬「クラスや学校の活動や生活の中で、人の役に立っていると感じていますか」(生徒)→4.7</p> <p>⑭「自分には、よいところがあると思いますか」(生徒)→4.9</p> <p>⑮「今の自分が好きですか」(生徒)→4.6</p>
自己評価	<p><u>分析(成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</u></p> <p>楽しい学校生活を送れている指標は全学年とも高く、各生徒がいろいろと感じていることはあるに違いないが、相対的に見て学校＝楽しいと感じている。</p> <p>⑬～⑮を見ると、学年が上がるにつれ指標も高くなる傾向があり、中学校での集団生活に慣れてきたことで、集団の中に自分の居場所や立ち位置が見つかると考えられる。</p> <p>早くから集団を意識させた取組を増やし、より自分の学校内での居場所づくりを授業と並行して行いたい。</p>
	<p><u>分析を踏まえた取組の改善</u></p> <p>総合的な学習の時間を、授業との相関関係を考えながら実施することは、大変重要であると考えられるが、より自己肯定感・自己有用感につながる取り組みを各学年に意図的に盛り込むことで、</p>

	学校全体の大きな PDCA サイクルを作り上げたい。
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>総合的な学習の時間において、教科や学校行事と関連付けながら探究的な学習活動を推進することは、子ども達の学びを深化させる上で非常に有効な方法であるといえる。また学年が進むにつれて子ども達の自己有用感および自己肯定感が向上している点から、教職員が学校教育目標のもとで一貫した教育活動を展開している成果が着実に表れていると考えられる。</p> <p>一方で、「あいさつ」に関しては、教職員のみが高いニーズを示している。この結果は、日常的なあいさつにとどまらず、部活動や公式の場面における礼儀としてのあいさつなど、社会人としての基礎力の一環として、「あいさつ」の指導が必要であるとの教職員の認識が反映されたものではないだろうか。</p>

(3)「健やかな体」の育成に向けて

重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な生活習慣の確立 ・保健教育の充実
具体的な取組	<ol style="list-style-type: none"> 1. 健康診断の結果と姿勢・からだと運動・生活習慣と疾病などの保健指導を行い、実践研究を進める。 2. 「久世教育機関協働協議会」より、「早寝・早起き・朝ごはん」及び「あいさつ」「家庭内のコミュニケーション」運動を展開することにより、<u>望ましい生活習慣</u>を自ら実践する力を育てる取組の充実を図る。
(取組結果を検証する) 各種指標	<p>学校評価アンケート</p> <p>⑩「毎日、朝ごはんを食べていますか」(生徒)</p> <p>⑪「7時間以上睡眠時間をとっていますか」(生徒)</p>

中間評価

各種指標結果	<p>学校評価アンケート</p> <p>⑩「毎日、朝ごはんを食べていますか」(生徒) …1年 6.0 2年 6.2 3年 6.2</p> <p>⑪「7時間以上睡眠時間をとっていますか」(生徒) …1年 4.6 2年 4.6 3年 4.6</p>	
自己評価	分析 (成果と課題)	<p>⑩の朝ごはんについては、全学年とも高い数値である。更に高まるよう期待したい。</p> <p>⑪の睡眠では、全学年低い数値となった。また、保護者と教職員の回答でも低い数値であった。(実現度:保護者 4.7・教職員 4.6) 重要度は高い数値なのに対して、実現度は低い。</p>
	分析を踏まえた取組の改善	<p>校内のさまざまな委員会(保健美化委員など)や久世教育機関協働協議会と連携し、睡眠時間や質の改善に向けた取り組みを進めていきたい。</p>
	(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標	<p>⑩「毎日、朝ごはんを食べていますか」(生徒)</p> <p>⑪「7時間以上睡眠時間をとっていますか」(生徒)</p>
学校関係	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>子ども達を取り巻く生活環境が大きく変化している中で、基本的な生活習慣や朝ごはんの習慣</p>	

係者評価	<p>が久世地域の家庭に根付いていることはプラスとして捉えることができる。一方で「朝ごはん」と「学力」については相関関係があるとの結果が、様々な調査によって明らかとなっているが、久世中学校においては、はっきりとした相関関係が見られない。そのため「朝ごはん」「学力」に係る他の要因を探っていく必要がある。</p> <p>また朝食や睡眠時間などの生活習慣は学校の働きかけや子ども達の努力では改善しにくい面があり、保護者のスタンスやスタイルに大きく委ねられている。地域のネットワークや保護者のネットワークを強化していくためには魅力的な地域行事やPTA行事を模索していかなければならない。</p>
------	--

最終評価

(中間評価時に設定した) 各種指標結果	
<p>⑩「毎日、朝ごはんを食べていますか」(生徒) …1年 6.3 2年 6.4 3年 6.3</p> <p>⑪「8時間以上睡眠時間をとっていますか」(生徒) …1年 4.6 2年 4.5 3年 4.6</p>	
自己評価	<p>分析(成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <p>保健美化委員会が中心となって、長期休業明けに生活改善を目的とした『健康アンケート』を実施し、結果を全校へフィードバックする取り組みを始めている。</p> <p>また養護教諭から毎月『保健室だより』を発行し、生活改善を促す取り組みをおこなっている。</p>
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <p>睡眠時間が課題であることについて、学校として可能な限りの取り組みを継続していきたい。また、スマートフォンやゲーム機の使用が睡眠時間の減少や睡眠の質の低下に大きく関わっていることが推測されるため、生徒自身が自制出来るよう促していきたい。</p>
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>近年、スマートフォンやSNS等の利用時間が増加し、子ども達の睡眠時間が年々短縮される傾向が見られる。この状況は今後も加速することが予想されるが、学校教育のみで解決を図ることは非常に困難である。そのため、地域活動、PTA活動、生徒会活動等が相互に連携し、現状の分析と課題解決に向けた啓発活動を継続的に実施していく必要がある。</p> <p>また、学校のみでは解決が難しい課題や、教員の力だけでは限界のある課題については、学校運営協議会が主体的に役割を果たすことが求められるが、その際、行政、社会福祉協議会、スクールソーシャルワーカー(SSW)等の関係機関との連携を強化し、包括的な支援体制を構築していくことが重要であると考えられる。</p>

(4) 学校独自の取組

<p>重点目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 久世学区が基盤とする「新たな久世スタンダード」へ向けての検討 2. 生徒の自己有用感を高め、自尊感情を育てる「ピア・サポート」事業の継続・展開。
<p>具体的な取組</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 共同機構久世学校運営協議会(小中合同)の充実。 2. 久世教育機関協働協議会(保小中・図書館・児童館)の充実 3. 学校運営協議会を支える学校支援推進委員会の充実。 4. 体験的な活動を通して子ども子どもたちの社会性を育む手段として、「ピア・サポート」活動に継続して取り組む。

(取組結果を検証する) 各種指標

1. 学校評価アンケート

⑱「久世三校が小中一貫教育を大切にしていること」(保護者・教職員)

2. 小中3校合同教務主任会、研究主任会、生徒指導主任会、合同授業研修会の実施回数。

中間評価

各種指標結果

・学校評価アンケート

19 久世三校が小中一貫教育を大切にしていること

[保護者] 重要度 6.6 実現度 5.1 [教職員] 重要度 7.0 実現度 4.6

自己評価

分析 (成果と課題)

- ・小中連携主任での定期会議によって、カリキュラムの共有や生徒・児童情報交換などを行い、4月入学時にて中1プロブレムへの対策としてスムーズな移行とサポートに取り組んだ。
- ・8月22日に久世三校小中合同研修会を開催し、生徒指導課主事による講演「保護者対応とアングーマネジメント」を聴き、分散会では4部会に分かれて意見交流をおこなった。

分析を踏まえた取組の改善

ピア・サポートへの実現度が他項目よりも低い位置にいるため、重要性を共通認識していかなければならない。一方で変わりゆく流れを捉え、ピア・サポートの形についても再考していく機会かもしれない。小中連携においては、今後も三校教務主任会や三校生指主任会、三校研究主任会がうまく機能しながら、さらに連携を深めていけるよう改善していかなければならない。

(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標

1. 学校評価アンケート

15 「ピア・サポート」を軸とした小中連携を進めること

19 久世三校が小中一貫教育を大切にしていること

2. 小6を迎える日、小中合同授業研修会(久世西小学校、大藪小学校)の実施

学校関係者評価

学校関係者による意見・支援策

久世三校ともに低学年からピア・サポート関連項目のアンケート結果が低い数値であるということは、久世地域の子どもの特徴的な実態であるといえる。また保護者の重要度もそれほど高くなく、ニーズ度も低い数値を示している。

全国学力学習状況調査の生徒質問紙にある「自分には良いところがあると思いますか」のアンケート結果は、これまでの数年間、毎年全国平均から大きくポイントを下回っていたが、今年度の3年生は全国平均を上回るアンケート結果となった。これは1年生時の「ふれあいひろば」2年生時の「チャレンジ体験」3年生時の「ふれあいタイム」というピア・サポートに関わる大きな取組の成果であると言える。またその成果を今後、文化祭で探究ポスターとして形に残し、生徒達自身の言葉でポスターセッションを行うことで、さらなる自己有用感の向上を期待したい。

最終評価

(中間評価時に設定した) 各種指標結果

学校評価アンケート

19 久世三校が小中一貫教育を大切にしていること

[保護者] 重要度 7.0 実現度 4.8 [教職員] 重要度 7.0 実現度 5.1

自己

分析 (成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題

中間評価と比べ、保護者においては「小中一貫教育」の重要度が上がったが、実現度は下がっ

評価	<p>た。また教職員においては、重要度は同推移となったが、実現度は上がった。</p> <p>ここからわかることは、保護者は義務教育の9年間を一貫した教育として期待したいところではあるが、まだまだの状態であるということ、教職員は後期にかけて小中一貫が進んだという認識があるということである。これは、11月に行った「小6を迎える日」「3校合同研修」「ふれあいタイム」などが影響しているといえる。</p>
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <p>保護者が期待している小中一貫教育として大切なことは、3校がチーム力を発揮できていることが、保護者に伝わることである。生徒会・児童会とのつながりや、チャレンジ体験、夏季合同研修会などの小中連携において、広報などでPRしていくことが重要である。また、小中合同で「保護者で学びあう会」等の交流会などを設定することができれば、実現度の上昇にも期待できるため、PTA等と連携して模索していきたい。</p>
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>子ども達の学校評価アンケートの結果を見ると、ピア・サポートの取組が着実に成果を上げていることが明らかとなっている。この成果は、単に異年齢交流の機会を設けたことによるものではなく、教職員がピア・サポートの意義を十分に理解し、その理念を踏まえたうえで教育活動を計画的に構築・実践してきたことによるものと評価できる。来年度においても、子ども達の自己有用感を高める「ピア・サポート」の取組を継続・発展させていく必要がある。</p> <p>特に、本取組は総合的な学習の時間における探究的な学習活動とも密接に関連している。そのため、国立教育政策研究所の滝先生からいただいた助言や指導内容を教職員間で共有し、取組の質をさらに高めるための改善・深化を図っていくことが重要である。</p>

(5) 教職員の働き方改革について

<p>重点目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 働き方改革の推進と教職公務員としてのやりがい実感による、教職員の心身の健康保持・増進。 生徒・保護者・教職員にとって教育効果が高まる業務改善と具体的な取組の推進。
<p>具体的な取組</p> <ol style="list-style-type: none"> 教職員の勤務状況等について出退勤システムの分析による適切な把握と管理職による面談 教育活動全般に関して具体的な業務改善の取組の推進。 <ul style="list-style-type: none"> ・教職員間の教育DX推進による効率化や勤務時間を意識した働き方の推進。 <p>(Teams や SharePoint、すぐーるのさらなる有効活用と電話業務の17:30設定)</p>
<p>(取組結果を検証する) 各種指標</p> <ol style="list-style-type: none"> 学校評価アンケート <ul style="list-style-type: none"> ⑳「働き方改革を意識した業務改善を進めること」(教職員) 出退勤管理システムによる勤務時間管理。 ストレスチェックの結果分析。

中間評価

<p>各種指標結果</p> <ol style="list-style-type: none"> 学校評価アンケート <ul style="list-style-type: none"> ⑳「働き方改革を意識した業務改善を進めること」(教職員) 実現度4.3(昨年度4.4) 出退勤システムによる勤務時間管理 <ul style="list-style-type: none"> 【時間外勤務()内は昨年度】
--

時間／月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
45時間以上	20名 (10名)	18名 (13名)	19名 (9名)	14名 (11名)	1名 (0名)	18名 (12名)
80時間以上	9名 (7名)	4名 (4名)	5名 (2名)	4名 (2名)	0名 (0名)	3名 (2名)
100時間以上	3名 (2名)	1名 (1名)	1名 (1名)	0名 (0名)	0名 (0名)	0名 (0名)

自己評価

分析（成果と課題）

昨年度と同じ時期の学校評価アンケートと比較すると実現度は4.4から4.3へと少し減少した。ニーズ度も25.8と2番目に高く、研修等を通じて早急に意識改善していく必要がある。出退勤管理システムによる時間外勤務の教職員の人数も増加しており、勤務時間の削減にはつながっていない。月別に見ると部活動の春季大会のシーズンと夏季大会がスタートする時期に時間外勤務が増加する。よって勤務時間の削減には、休日部活動の地域展開を進めることが近道であると考えているが、思うように進んでおらず、大きな現状の変化をのぞめる見通しは持てない。

分析を踏まえた取組の改善

- 定期テストの採点処理ソフト「百問繚乱」の活用による採点時間の削減
- 校務支援員の活用による作業の削減
- 留守番電話対応時刻の徹底やエコデー（毎週金曜日）の啓発による19時退勤
- 「すぐー」アプリの活用による保護者への連絡業務の削減
- 働き方に関する意識改革をめざした校内研修

（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標

1. 学校評価アンケート
 - ②0「働き方改革を意識した業務改善を進めること」（教職員）
2. 出退勤管理システムによる勤務時間管理
3. ストレスチェックの結果分析

学校関係者評価

学校関係者による意見・支援策

今年度は女子バレーボール部と男子バスケットボール部が外部企業「(株)リーフラス」の協力によって活動している。これまでの部活動指導員に加え、外部企業から1名ないし2名のコーチが派遣されている。一方で平日は今までと変わらず教職員が部活動指導を行っているので、大きく働き方改革が進んだとは言いがたい。9月には教頭より「教職員の働き方の意識改革」をテーマに研修を行ったため、少しずつ働き方の意識が変化していくことを期待したい。

最終評価

（中間評価時に設定した）各種指標結果

- ①学校評価アンケート
 - 20「働き方改革を意識した業務改善を進めること」（教職員） 実現度 4.5（昨年度 4.4）
- ②出退勤管理システムによる勤務時間管理
 - ◎時間外勤務（ ）は昨年度

時間／月	9月	10月	11月	12月	1月
45時間以上	18名 (12名)	19名 (14名)	14名 (12名)	10名 (12名)	10名 (10名)
80時間以上	3名 (2名)	5名 (3名)	1名 (1名)	1名 (1名)	0名 (0名)
100時間以上	0名 (0名)	1名 (0名)	0名 (0名)	0名 (0名)	0名 (0名)

③ストレスチェックの結果分析

高ストレスの教職員は0名。学校組織全体のストレス度合いも極めて低いという結果が示された。

自己評価

分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題

教職員のアンケートを見ると、7月よりも実現度が上がり、昨年度の同じ時期と比べても実現度が上がっていることがわかる。しかし、出退勤システムで月ごとの時間外勤務の教職員の人数を見ると、昨年度と同様か時間外勤務が増加しているという結果が見られる。働きやすさと働きがいと両立できていると捉えることもできるが、45時間以上80未満の時間外勤務を行っている教職員のほとんどが、運動部や吹奏楽部の顧問であり、公式戦や演奏会を含めて休日に長時間部活動指導を行っている教職員である。一方で部活動指導の地域展開実証実験を行った部活動については教職員の時間外勤務が大幅に減少したため、部活動地域展開や授業日数・教育課程における国レベルや京都市レベルでの抜本的な改革がない限り、校内努力だけではこれ以上の時間外勤務の減少は難しいと感じている。

また今年度は教頭より教職員の働き方改革に関する国の動向や働き方の意識改革について教職員研修会を行ったことも一定の成果が見られた。

分析を踏まえた取組の改善

- ・採点ソフト「百問繚乱」のさらなる活用
- ・教育課程の見直しによる行事内容の精選
- ・「すぐーる」アプリの効果的な活用
- ・留守番電話への設定時刻を17時30分へ変更
- ・学校閉鎖時刻19時の徹底
- ・統合端末や2ndGIGA 端末の持ち帰り申請の奨励
- ・働き方改革に関する教職員研修

学校関係者評価

学校関係者による意見・支援策

指標結果を見ると、働き方改革は着実に進展していると言える。特に部活動に関しては、教育委員会をはじめとする関係機関が連携し、外部委託事業者への移行が実現すれば、教職員の負担軽減が一層図られることが期待される。また、来年度に向けては、電話対応時間を17時30分までとする運用の実現を目指していく必要がある。

一方で、久世地域では今後生徒数の増加が見込まれるものの、それに対応する教職員数が必ずしも比例して増加するわけではないことが懸念される。しかし、久世地域に限らず、京都市全体として、学校・保護者・地域が協働して子どもたちの健全育成を図ろうとする意識が高く、教職員に対する保護者の信頼も比較的厚い。今後、働き方改革をさらに推進するにあたっては、これまで地域や保護者との間で築かれてきた関係性や信頼を損なうことのないよう配慮しつつ、持続可能な教育活動の実現に向けて取り組みを進めることが求められる。

(6) いじめの防止等についての取組に向けて

重点目標 ・自己肯定感の育成 ・違いを認めあえる心の育成
具体的な取組 「学校いじめの防止等基本方針」に同じ
(取組結果を検証する) 各種指標 1. 全教職員が学校いじめの防止等基本方針の内容を理解し、組織的対応に努めている。 2. 学校がいじめ対策委員会のメンバーを、生徒に紹介している。 3. いじめに係る既存の「学校評価:生徒アンケート項目」を活用して、以下の項目を分析する。 ⑥「楽しく学校生活を送っていますか？」 ⑩「クラスや学年、学校の仲間を大切にしていますか？」 ⑪「学校であったことを家の人に話していますか？」 ⑫「困ったことや嫌なことがあったら、友だちや周りの大人に相談できますか？」 4. 生徒・保護者の訴え(アンケート結果含む)や相談内容を、全教職員で共有している。 5. 保護者や学校運営協議会等に、学校いじめの防止等基本方針や学校の取組を説明・周知している。

中間評価

各種指標結果 1. 学校評価アンケート⑩「生徒の悩みを聴いたり、様子が気になる生徒への声掛けをすること」(教職員)の項目の重要度が6.9という非常に高い回答であった。実現度は、5.6で「できている」との回答が多かった。 2. 4月の始業式で学校長から全校生徒に対して、対面で紹介をした。 3. ⑥「楽しく学校生活を送っていますか？」…1年5.8 2年5.7 3年5.9 ⑩「クラスや学年、学校の仲間を大切にしていますか？」…1年5.9 2年5.7 3年6.1 ⑪「学校であったことを家の人に話していますか？」…1年5.1 2年5.0 3年5.4 ⑫「困ったことや嫌なことがあったら、友だちや周りの大人に相談できますか？」 …1年4.9 2年4.8 3年5.3 4. 教職員で週1回おこなっている補導係会やいじめ不登校対策委員会、職員会議での情報共有等で相談内容の共有をした。 5. 学校ホームページや保護者連絡ツール「すぐーる」で保護者に説明・周知した。

自己評価	分析(成果と課題) 学校評価アンケート⑩「生徒の悩みを聴いたり、様子が気になる生徒への声掛けをすること」(教職員)の項目の実現度5.6をさらに高めていきたい。 学校評価アンケート⑫「困ったことや嫌なことがあったら、友だちや周りの大人に相談できますか？」の1、2年の数値がやや低かった。
	分析を踏まえた取組の改善 教員が心に余裕を持って子どもとの関わりが出来るように、その他の業務の働き方改革をより一層進めていく。 教職員が通常授業や特別活動、行事等で学校目標を意識した取り組みをさらに進める。
	(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標 学校評価アンケート(教職員) ⑩「生徒の悩みを聴いたり、様子が気になる生徒への声掛けをすること」

	<p>学校評価アンケート(生徒)</p> <p>⑥「楽しく学校生活を送っていますか？」</p> <p>⑬「クラスや学年、学校の仲間を大切にしていますか？」</p> <p>⑭「学校であったことを家の人に話していますか？」</p> <p>⑮「困ったことや嫌なことがあったら、友だちや周りの大人に相談できますか？」</p>
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>教職員が心に余裕を持って生徒達と接し、生徒達が安心して、学校生活を送れる環境づくりを推進してほしい。様々な課題や特性を持った生徒が在籍している中で、誰もが落ち着いた学校生活を送れるよう、日常の様々な場面で目立たない生徒にも意識してコミュニケーションをとっていくことが重要である。また教職員の働き方改革はニーズ度が高いが、一方で「生徒の悩みを聞いたり、様子が気になる生徒への声かけをしたりすること」の実現度も高い数値を示していることから、働き方改革が大きく進んでいない状況においても、教職員の丁寧な生徒指導が行われているといえるのではないだろうか。</p>

最終評価

	<p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <p>学校評価アンケート(教職員)</p> <p>⑮「生徒の悩みを聞いたり、様子が気になる生徒への声掛けをすること」重要度6.8 実現度5.6</p> <p>学校評価アンケート(生徒)</p> <p>⑥「楽しく学校生活を送っていますか？」 1年 6.0 2年 5.9 3年 6.1</p> <p>⑬「学校であったことを家の人に話していますか？」 1年 5.0 2年 5.3 3年 5.4</p> <p>⑭「困ったことや嫌なことがあったら、友だちや周りの大人に相談できますか？」1年4.9 2年5.1 3年5.6</p> <p>⑮「クラスや学年、学校の仲間を大切にしていますか？」 1年 6.0 2年 6.0 3年 6.2</p>
自己評価	<p>分析(成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己肯定感の育成 →各教科指導や様々な行事を通して、教職員がこの目標を意識しながら生徒と関わっていた。 違いを認めあえる心の育成 →上記と同じく、様々な場面で教職員が意識して生徒に関わっていた。また、ヒューマンタイム(人権学習)などを通して、そうした心の育成に取り組んでいた。
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <p>・教職員の時間と心の余裕を作り出すことで、生徒との関わりに深みが増すと思うので、引き続き働き方改革を学校体制として取り組んでいきたい。</p>
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>久世地域には多様な背景をもつ住民の流入が進んでおり、学校は多様化する価値観を持つ生徒・保護者への対応を求められている。地域住民同士の結びつきが希薄化すると、保護者の意識が我が子のみの利益に偏りやすくなり、些細なトラブルが契機となって「いじめ重大事案」へと発展してしまう事例が、東京都をはじめ全国各地で報告されている。</p> <p>また、不登校支援においても、学校や教職員のみで対応するには限界がある。久世地域には、すでに不登校支援に取り組む地域人材も存在することから、学校地域協働本部の設置や、行政機関との連携を強化するなど、地域全体で支援体制を構築していくことが重要である。学校・地域・行政が協働し、総合的かつ継続的な支援に取り組む体制を整えていくことが求められる。</p>